

非結核性抗酸菌症患者における咳関連QOLの検討

鈴木 貴人, 遠藤 慶成, 渡邊 裕文, 田中 悠子, 下田由季子, 三枝 美香,
赤松 泰介, 山本 輝人, 宍戸雄一郎, 秋田 剛史, 森田 悟, 朝田 和博,
白井 敏博

静岡県立総合病院 呼吸器内科

【背景と目的】 咳嗽は非結核性抗酸菌症（NTM）患者の主要な症候の一つであり，診断の契機となる一方で患者のQOLを低下させ得る要因である。しかし，QOL低下の程度や臨床所見との関連は明らかでない。今回，NTM患者における咳関連QOLについて検討した。

【対象と方法】 対象は2015年10月から12月までに当院にNTM症として外来通院していた78名（男性24名，女性54名，平均年齢70（34-90）歳）。外来受診時にLeicester Cough Questionnaire（LCQ）日本語版（新実・小川訳），Cough and Sputum Assessment Questionnaire（CASA-Q）日本語訳（Boehringer Ingelheim），Fスケール問診票（FSSG）を実施した。咳関連QOLとGERDの有無，臨床所見との関連について検討した。

【結果】 受診時のLCQ合計点は平均17.79（満点21.00）と低下し，CASA-Qでも，咳症状平均72.97（満点100.00），咳インパクト平均90.71，痰症状平均79.17，痰インパクト平均91.99と障害されていた。GERDの合併は22人（27.8%）であった。LCQとCASA-Q，FSSGは有意な相関を認めた。CASA-QとFSSGは咳症状ドメインを除いて有意な相関を認めた。NTMにおいて線維空洞型，排菌陽性群で有意にLCQ合計点が低かった。GERD合併によるLCQ合計点の有意な低下は認めなかったが，治療介入群ではGERD合併が有意に多かった。

【結語】 NTM患者において咳関連QOLが低下しているが，線維空洞型や排菌陽性群で特に咳関連QOLが障害されていた。GERD合併は27.8%のNTM患者で見られ，治療介入群で特に多かった。